



塾長と語る 慶應義塾での学びと学生生活



長谷山塾長のもとに5つの学部・大学院から5名の塾生に集まってもらい、それぞれの学びと学生生活のほか、慶應義塾への思いや将来の夢などについて語り合ってもらいました。

塾長になって丸1年、本日はさら

は小学校入学から大学学部卒業までと同じ期間です。教員として慶應義塾に戻ってきたのは1997年。その後、文学部長や、清家前塾長のもとで常任理事を務め、昨年5月、塾長に就任しました。また、体育会相撲部長や学生総合センター長などの経験から、塾生の皆さんと接することで教員として多くのことを学びました。この経験は塾長となった現在も生きていると思いま

す。塾長になって丸1年、本日はさら

【参加者】

長谷山 彰 塾長

〈写真右より〉

法学部政治学科4年

反保 真優 君

環境情報学部3年

郡司 裕也 君

文学部美学美術史学専攻4年

ジュビアルト、パトリスユージン 君

理工学研究科後期博士課程1年

鈴木 敬和 君

医学部4年

小川 優里奈 君

司会

高野 泰彦 広報室長

私たちが慶應義塾で学ぶ理由

司会 本日は「塾長と語る慶應義塾での学びと学生生活」ということで学部が異なる5人の塾生に集まっていたいただきました。まず長谷山塾長から自己紹介を兼ねてお話を始めてください。

に深く塾生の皆さんのことを理解すべくお話をうかがいたいと思いますので、遠慮なくお話しください。

ジュビアルト 私はもともと写真を学びたくて、日本への留学を考えました。当初は美術系大学進学を想定していたのですが、いろいろ調べているうちに

学芸員資格の取得を考えるようになりました。そこで資格が取得できる大学というところで、慶應義塾大学文学部にたどり着いたのです。ここで3年間学んでいっているうちに、美術史に限らず多方面への興味が広がっていきました。慶應義塾では文学部に所属していても、他学部で開講されている関連分野も学ぶことができるのがありがたいです。**塾長** どのような関連分野の科目を学んでいるのですか？

ジュビアルト 社会学、政治学、文化人類学などです。特に関心を持っているのは法学部の「ナショナルリズム」に関する授業で、アジアなど植民地地



あきら 塾長
せやま
はせ 谷山

た土地に根付くポストコロニアリズムの問題について考えています。

塾長 政治と芸術表現の関係について学問領域を超えて学べるのは総合大学ならではのメリットですね。日本の大学の印象はいかがですか？

ジュビアルト インドネシアの大学はいわゆる実学重視。インターンシップも2年生から始めるなど、仕事に直結する学びが中心です。それに比べて日本の大学は一人ひとりの関心に応じて、広く深く学べると感じています。

司会 反保さんは和歌山県出身でFIT入試（B方式）での入学でしたね。これはさまざまな地域の意欲ある学生の思いに応えるために導入した入試制度です。「慶應義塾で学びたい！」と思ったきっかけはということだったのですか？

反保 慶應大阪シティキャンパスで開催された法学部の模擬講義で、現在ゼミで指導していただいている大石裕教授の模擬授業を受講して感激したことがきっかけです。当時大きなニュースになっていた集団的自衛権が授業のテーマで、この問題に関するいろいろな考え方やメディアの報じ方についてわかりやすく解説していただき、「この



文学部美学美術史学専攻4年
ジュビアルト,
パトリスユージン 君

インドネシアからの留学生。遠山公一教授の研究会でアジアの近現代美術について研究する。

先生のもとで勉強したい」と思ったのです。無事入学を果たした後は、地元和歌山の三田会奨学金をいただくことができ、経済的支援も受けながら慶應義塾で学ぶことができています。

塾長 それで現在、念願かなって大石教授のもとでジャーナリズムを学んでいるのですね。地域の三田会奨学金は単に経済的な援助だけではなく、交付式や懇親会を通して、地域の塾生と塾員の絆をつくるとても義塾らしい制度です。

反保 はい、毎年、和歌山の三田会懇親会に参加しています。大先輩の方々も温かく迎えてくださいます。

塾長 かつてある塾員の方が三田会奨学金のことを「恩」ではなく「縁」だと思っただけでほしいとスピーチされたことが心に残っています。先輩から後輩に代々「縁」を伝えるサイクルが、三田会の絆といえるでしょう。ジャーナリズムにおける報道のあり方を研究する

反保さんには、福澤諭吉が創刊し、国民的な議論のために客観的な報道を目指した「時事新報」のことも研究されると面白いかもしれません。

反保 ありがとうございます。調べてみます。

社会と世界を見る目を養う 学びの場

司会 鈴木さんはこの中で最年長。現在は博士課程教育リーディングプログラム、いわゆる「リーディング大学院」で学んでいるのですね。

鈴木 はい、理工学部電子工学科を卒業後、修士1年の秋からプログラムに参加しています。義塾で学ぶのは塾長の半分、8年目となります。私が学んでいるリーディング大学院は修士2つと博士1つを5年間で取得できる「オールラウンド型」と呼ばれるもので、文系と理系の塾生が融合して学ぶプログラムです。理系出身の場合、副専攻

は文系分野の学問を選ぶことになっており、私は経済学を選びました。画期的でやりがいがあるプログラムです。

塾長 日本の未来を考えると、高度な教育を受けた博士人材が、大学や研究機関だけではなく社会のさまざまな分野で活躍しなければなりません。そこでリーディング大学院が大きな役割を果たすと私は考えています。

鈴木 そうですね。大学院に入るまでは理系の考えで「いいものを作れば売れる」と思っていたのですが、経済学を学んでいる今はそうではないことがわかります。これからのエンジニアは、社会とマーケットを多面的に見る目を養い、良い製品や技術が「どう使われるか」「どう売れるか」までを考えられる人材であるべきです。

塾長 リーディング大学院では実務家による教育や海外での学びの機会も豊富に用意されていますね。

鈴木 はい、毎週土曜日、企業の実務に携わる方々がメンターとしてゼミを開催されています。私は少子高齢化の中で日本はどうするべきかについて、政府への提言を前提にメンターの方や文系の塾生と議論しながら政策課題をまとめています。海外での学びはまず



理工学研究科後期博士課程1年
すずき たかかず
鈴木 敬和 君

理工学部卒業後、2015年秋学期より博士課程教育リーディングプログラムで学ぶ。

修士1年次に5週間海外インターシップを体験し、博士課程では半年間及び海外短期留学がありました。これがいい経験になりました。

塾長 英語は得意だったのですか？

鈴木 いえ、まったく(笑)。それまでは通り一遍の英語の勉強しかしていませんでした。でも、大学院でインターンシップや国際会議を重ねているうちに英語で発信することに対する苦手意識が解消されていきました。

塾長 英語でのコミュニケーション能力を向上させるために大切なことは何だと思えますか？

鈴木 ちよっとした勇気だと思えます。何事も最初から無理だと思わず、たとえ失敗してもやってみようという気持ちがあれば英語力は伸びるはず。修士課程に入学してすぐの海外インターンシップに行くときは、内心は不安でいっぱい。案の定、現地では周囲の人たちが何を言っているかわからない



法学部政治学科4年
たんぼ まゆ
反保 真優 君

和歌山県出身で和歌山三田会奨学金等を受給。ジャーナリスト志望で慶應スポーツ新聞会に所属する。



……。でもその苦勞を乗り越えることができ、大きく成長することができました。塾長 まずは黙っていないで自分から積極的に話しかけることが大切かもしれませぬ。

鈴木 海外では言語の問題以前に、自分の意見をしっかりと相手に伝えることの重要性を痛感しました。それまで私は日本でも自分の意見を積極的に言うタイプではありませんでしたが、海外体験でそこが大きく変わりました。

文武両道が慶應義塾の スタンダード

司会 新病院棟が今年5月にオープンしたばかりの信濃町キャンパスで学ぶ小川さんはいかがですか。医学部生は1年生のときは他学部生と一緒に日吉で学び、2年生から信濃町に移ります。

小川 はい、信濃町に移ると一気に世界が変わります。何しろ最先端医療の現場で、医師でもある先生方から医学を学びますので、自分が将来医学の世界で生きていくという思いをあらためてかみしめることになりました。

塾長 医師国家試験を目指す医学部生の学生生活はどのようなものですか？
小川 思っていたよりずっと楽しいで

す。医学部生は勉強ばかりしている印象を持たれがちなのですが、実は課外活動も盛んで、私も硬式庭球部に所属しています。周囲にも勉強と部活のメリハリをつけて学生生活を楽しんでい

る人が多いと感じています。試験のときは大変なのですが、同級生が協力し合って勉強する雰囲気があるのでつくらはないですね。共に医師を目指す素晴らしい仲間と過ごす学生生活は充実しています。

塾長 それは良かった。ところで新病院棟の印象はいかがですか？

小川 とても近未来的で、ここから医師への道を歩むのだと思うとなんだかワクワクしてきます。

塾長 私も内部を見学したのですが、ほとんどロボットのように見える最先端の手術設備などに圧倒されました。その一方で患者さんやご家族のくつろぎを考えて、木の葉や花をイメージしたインテリアデザインで快適な、杜の空



医学部4年
おがわ ゆりな 君
小川 優里奈

慶應義塾中等部、女子高等学校から医学部に進学。医学部硬式庭球部の選手として活躍する。



環境情報学部3年
ぐんじ ゆうや 君
郡司 裕也

体育会野球部で4番打者を務めるキャッチャー。東京六大学野球2018春季リーグ戦優勝にも貢献。

間”となっているところもいいですね。
小川 新病院棟での実習が今から楽しみです。でも私は医学部の伝統を感じさせる古い病院棟にも愛着があります。数々の先輩たちが切磋琢磨してきたという歴史の重みを感じます。

塾長 なるほど、そうした学部の歴史をたどる思索はすてきですね。ぜひ、先輩たちが続く、立派な医師を目指してください。

司会 さて、最後はSFCで学び、体育会野球部の主軸選手として活躍する郡司さんです。

塾長 郡司さんには、ぜひ、学生生活における文武両道のバランスについてうかがいたいですね。キャッチャーである郡司さんは、試合の流れを読んでリードを考えるなどチームの中でも知性が問われるポジションですね。

郡司 そう言っていただけだとうれいんです。でもキャッチャーはあくまでも裏方で、強打者を抑えてもそれはピ

ツチャーの手柄であまりほめてもらえないのが現実です（笑）。文武両道ということは野球部監督からいつも言われていました。慶應義塾の学生である限り、学問をおろそかにしてはいけませんと自戒しています。SFCではピッチャーの動作解析を通して「打ちにくいピッチャーとは？」というテーマで研究をしています。

塾長 ほう、それは面白い研究ですね。慶應義塾の歴史の中でスポーツは重要な位置を占めています。1920年のアントワープ五輪で日本に初めてメダルをもたらしたテニスの熊谷一弥選手は塾員でしたし、郡司さんが所属する野球部も日本野球の歴史を彩る数々の伝説を打ち立ててきました。

郡司 僕は子どもの頃からそうした慶應義塾の「文武両道」への憧れを育んできたように思います。兄が慶應義塾

高等学校の野球部に入ったので自分も同じ道に進もうと思ったのですが入試に失敗。結局、仙台育英学園高等学校の野球部で甲子園大会準備優勝を果たすことができました。

塾長 それは素晴らしい。確か仙台育英の理事長先生は塾員でしたね。

郡司 はい。私自身、長年の慶應義塾への思いを断ちがたく、AO入試でリベンジを果たし、念願かなってSFCに入学しました。

塾長 「甲子園」と「神宮」という学生野球の大舞台をどちらも経験されていますが、その二つの違いはどういうところにありますか？

郡司 甲子園大会は予選から本戦にかけて多くのチームと対戦する激戦ですが、東京六大学野球は大学同士が全力でぶつかり合う独特の熱さがあります。そしてやはり早慶戦は単なる勝負を超えた特別な対戦ですね。

塾長 実際に神宮に応援に行くと、郡司さんの言う「熱さ」や「特別」のニュアンスがわかると思います。ぜひ、皆さんも足を運んでください。

反保 私は応援に行きました。予想以上の面白さでした！

ジュビアルト 僕も神宮に行き、スタ

ンドの大盛り上がりに驚きました。

多様な学びとそれぞれの未来

司会 広報の立場で一つ聞きたいのですが、皆さんは慶應義塾で学ぶ良さやどのようなところに感じていますか？

反保 ジュビアルトさんも言っていますが、学部を超えて幅広くいろいろな分野の学問に触れられる点が素晴らしいです。また、塾生にもほんとうにいろいろなタイプの人がいて、日々刺激をもらっています。

ジュビアルト 同感。バンドをやっていたり、映画を撮影していたり、いろいろなタイプの友人ができることが慶應義塾の魅力。また僕もインドネシアから来ましたが、世界中からの留学生がいまので国際色も豊かです。

郡司 SFCはそれこそ学べないジャンルはないと言っているほど、あらゆる学問に触れられます。シンガソングライターや芸能活動をしている塾生がいたりとおそらく他大学の野球部員だとなかなか知り合えないような友達ができますね。

鈴木 理工学部の一〜二年生は日吉で文系の塾生と一緒に学びます。卒業すると塾員が実に多様なジャンルで活躍





していることがわかりますが、在学中から文系学部にも交友を広げておくと、学生生活も、卒業後も、見える世界が違ってくるかもしれません。

小川 医学部は1年間しか日吉で過ごしません、やはり医療系の大学とは異なる総合大学ならではの交流があると思います。医学部独自のクラブはもちろん、全塾のクラブ・サークルに所属している医学部生も少なくありません。私は慶應義塾女子高等学校から進学しましたが、医学部にも慶應義塾としてのカラーが確かに息づいていると感じています。

塾長 皆さんがそれぞれ指摘された通り、慶應義塾には総合大学としての魅力があります。しかも単に多様な学部が集まっているだけでなく、それらが融合して活動できる真の総合大学を志向しています。卒業後も経済界や政界、学界のみならず、スポーツ、芸術、ファッション、芸能など幅広い分野で塾員が活躍しており、三田会を通して塾員同士の交流も盛んです。

司会 最後に皆さんの今後の目標を聞かせてください。

反保 私の夢は入学前から変わらず新聞記者志望。読者に勇気とパワーを与えられるような記事を書きたいと思っています。

ジュビアルト 入学当初は学芸員になることを考えていましたが、慶應義塾で幅広く学んでいるうちに、日系企業でインドネシアと日本の懸け橋となる仕事をしたと思うようになりました。

郡司 将来は、やはりプロ野球選手です。SFCでリーダーシップ論を学んでいるので、ゆくゆくはチームを率いる監督になりたいとも思っています。

鈴木 そもそもリーディング大学院に入ったのは、博士号を持った視野の広い技術者になるためでした。修了後は

実社会で働くつもりです。ただ、学問研究の面白さも痛感していますので、50歳を過ぎたら大学や大学院で教えるのも面白いかなと思っています。

小川 私はもちろん医師になります。医師といっても病院だけでなく幅広く活躍の場がありますので、自分の適性を見極め、視野を広げてこれからじっくり将来のことを考えていきたいと思っています。

塾長 皆さんそれぞれの立場で高い志を持って自分の将来を考えていることに感銘を受けました。夢を実現させるのは簡単なことではありませんが、ぜひ達成されることを心から願っています。今日は多様な学びができる慶應義塾の魅力というお話が出ましたが、大学時代はそれぞれが何か一つ自分の「核」となるものを持つことも大切だと私は思います。その核を起点に多様な分野に好奇心を広げていけば、単なるつまみ食いではない知性の広がりを得ることができましょう。何か困ったことや迷いがあれば、遠慮なく私を含む教職員に相談してください。本日は本当に興味深いお話をうかがうことができて楽しかったです。ありがとうございます。